

<マニュアル訂正連絡票>

ASP システム説明書 V28

[J2K0-5790-01]

2017年4月26日発行

修正箇所(章節項): 6.4.3 ファイル容量の見積り

旧記事

(1) 順編成ファイル

順編成ファイルのファイル容量は次の計算式で求められる。

$$\text{ファイル容量} = \left\lceil \left(1 + \left\lceil \frac{4+r1 \times bf}{s1} \right\rceil \times \left\lceil \frac{dn}{df} + 1 \right\rceil \right) \times \frac{s1}{1024} \right\rceil \text{ [Kバイト]}$$

r1: レコード長, bf: ブロック化因数, dn: データ件数, s1: セクタ長(512バイト),
↑↑: 切上げ

ファイルが存在する磁気ディスク装置のセクタ長により、ファイル容量は異なる場合がある。
また、ファイル容量の最大値は 2097151K バイトである。

(2) 索引順編成ファイル

索引順編成ファイルのファイル容量は次の計算式で求められる。

$$\text{ファイル容量} = \left\lceil (1 + mi2 + mi1 + idx + data + ovr) \times \frac{s1}{1024} \right\rceil \text{ [Kバイト]}$$

mi2: 2次マスタインデックス領域のセクタ数

$$mi2 = \left\lceil \frac{4 + (k1+2) \times k}{s1} \right\rceil$$

mi1: 1次マスタインデックス領域のセクタ数

$$mi1 = \left\lceil \frac{4 + (k1+2) \times mibf}{s1} \right\rceil \times k$$

idx: インデックス領域のセクタ数

$$idx = \left\lceil \frac{4 + (k1+2) \times idf}{s1} \right\rceil \times mibf \times k$$

data: データ領域のセクタ数

$$data = \left\lceil \frac{4+r1 \times bf}{s1} \right\rceil \times \left\lceil \frac{dn}{abf} + 1 \right\rceil$$

ovr: オーバーフロー領域のセクタ数

$$ovr = \left\lceil \frac{4+r1 \times bf}{s1} \right\rceil \times \left\lceil \frac{dN}{bf} \right\rceil$$

r1: レコード長, bf: ブロック化因数, k1: キー長, s1: セクタ長(512バイト),
dn: データ件数, dN: オーバーフロー領域のデータ件数,
abf: 実装ブロック化因数, k: エクステンション数(注1),
ibf: インデックスブロック化因数,
mibf: 一次マスタインデックスブロック化因数(注2),
↑↑: 切上げ

~ (以下、略) ~

(1) 順編成ファイル

順編成ファイルのファイル容量は次の計算式で求められる。

$$\text{ファイル容量} = \left\lceil \left(1 + \left\lceil \frac{4+r1 \times bf}{s1} \right\rceil \times \left\lceil \frac{dn}{bf} + 1 \right\rceil \right) \times \frac{s1}{1024} \right\rceil \text{ [Kバイト]}$$

r1 : レコード長, bf : ブロック化因数, dn : データ件数, s1 : セクタ長(512バイト),
↑↑ : 切上げ

ファイルが存在する磁気ディスク装置のセクタ長により、ファイル容量は異なる場合がある。
また、ファイル容量の最大値は 2097151K バイトである。

(2) 索引順編成ファイル

索引順編成ファイルのファイル容量は次の計算式で求められる。

$$\text{ファイル容量} = \left\lceil (1+mi2+mi1+idx+data+ovr) \times \frac{s1}{1024} \right\rceil \text{ [Kバイト]}$$

mi2 : 2次マスタインデックス領域のセクタ数

$$mi2 = \left\lceil \frac{4 + (k1+2) \times k}{s1} \right\rceil$$

mi1 : 1次マスタインデックス領域のセクタ数

$$mi1 = \left\lceil \frac{4 + (k1+2) \times mibf}{s1} \right\rceil \times k$$

idx : インデックス領域のセクタ数

$$idx = \left\lceil \frac{4 + (k1+2) \times ibf}{s1} \right\rceil \times mibf \times k$$

data : データ領域のセクタ数

$$data = \left\lceil \frac{4+r1 \times bf}{s1} \right\rceil \times \left\lceil \frac{dn}{abf} + 1 \right\rceil$$

ovr : オーバーフロー領域のセクタ数

$$ovr = \left\lceil \frac{4+r1 \times bf}{s1} \right\rceil \times \left\lceil \frac{dN}{bf} \right\rceil$$

r1 : レコード長, bf : ブロック化因数, k1 : キー長, s1 : セクタ長(512バイト),
dn : データ件数, dN : オーバーフロー領域のデータ件数,
abf : 実装ブロック化因数, k : エクステント数 (注1),
ibf : インデックスブロック化因数,
mibf : 一次マスタインデックスブロック化因数 (注2),
↑↑ : 切上げ

～ (以下、略) ～

2015年1月26日発行

修正箇所 (章節項) : 11.11.3 LT0 装置のバックアップ運用

(1)媒体をセットしたまま長時間放置すると媒体劣化, 装置誤動作の原因となるため, ハーフジェクト状態(媒体がテープヘッドから離れた状態)にする。

(2)UNLDMT EJECT-@NO を実行した場合は, LOADMT コマンドでロード状態にする必要がある。また, システム始動ジョブの場合は, LOADMT コマンドで装置のレディを待ち合わせる。

(3)UNLDMT EJECT-@YES を実行すると媒体が装置から取り出される.

新記事

(1)媒体をセットしたまま長時間放置すると媒体劣化, 装置誤動作の原因となるため, ハーフイジェクト状態(媒体がテープヘッドから離れた状態)にする.

(2)UNLDMT EJECT-@NO を実行した場合は, LOADMT コマンドでロード状態にする必要がある. また, システム始動ジョブの場合は, LOADMT コマンドで装置のレディを待ち合わせる.

(3)UNLDMT EJECT-@YES を実行すると媒体が装置から取り出される.

(4)UNLDMT コマンドまたはイジェクトボタンで媒体を装置から取り出した後, 媒体に読み書きしようとする時, 以下のいずれかのメッセージが通知され, 処理が中断される. 媒体に読み書きしたいときは, メッセージ番号に応じた利用者処置を行う.

メッセージ番号	利用者処置
S5004 装置がレディ状態である (再開可能)	媒体を装置に挿入してロード状態にした後, 要求メッセージへの応答で処理を続ける.
S5546 入出力装置が介入要求状態である	LOADMT コマンドを実行して LOAD 状態にした後, 読み書きをやり直す.

以上